人権講座概要
2018 年度　世界人権問題研究センター第６回人権大学講座
2018 年８月 29 日　ハートピア京都

「ひょうたん島問題—多文化共生のためのワークショップー」

藤原孝章

はじめに

簡単な自己紹介をかねて、『ひょうたん島問題』、『SDGs と開発教育』、『18 歳成人社会ハンドブック』、『教師と人権教育』の四書を紹介し、講師の専門分野などの紹介をした。参加者は 40 名で、男女がほぼ同数で、外国人留学生数名も参加。5 人一組のテーブルに着席していたので自己紹介を手短にやっていただいた。

１、ひょうたん島の概要の紹介

動画を使って、森と水に恵まれ、温暖な気候で、豊かな暮らしをしている「ひょうたん島」に、気候や生活条件が厳しい「カチコチ島」から働き者のカチコチ人がやってくる、そして、のんびりとその日その日のくらしをしてきたが人口増加に直面している「パラダイス島」からパラダイス人がやってくるという設定で、あいさつ、労働と祝祭への参加、子どもの教育、居住地域における公共的な負担など社会問題が生じてくることを紹介する。

２、「ひょうたんカーニバル」のロールプレイ

島をあげてのひょうたん島の祝祭である「ひょうたん島カーニバル」に、働き者のカチコチ人が参加しないことで、祝祭と労働が社会問題となることを提示した。そのうえで、ひょうたん文化への同化を主張する「ひょうたん文化保存会会長」、ひょうたん人の文化的同化に反対する「カチコチ文化協会代表」、個人の自由や文化的平等を主張する「ひょうたん大学教授」、労働条件の条件付き参加をカチコチ人の側から主張する「カチコチ労働者協会代表」、すべての人が参加するように主張する「ひょうたんカーニバル実行委員」の５つの人物に扮してロールプレイングをする。同じ役割の人が集まって「人物理解」をすすめた上で実施した。話し合いのねらいは、互いの主張をすることによる議論空

間の創出と「役割演技」をすることによる気持ちの変化に気づくことである。そして、互いの主張をすればするほどなかなか解決策が見いだせないことにもきづいていく。

ロールプレイ終了後にはグループで、役割演技の感想を共有するともに、マジョリティやマイノリティの立場について感情や気持ちも伝えあう。次に、役割をはなれて、現実の問題解決にはどんなことが考えられるかを話し合った。

３、在住外国人についての情報提供

1980 年までは 70 万人台で在日コリアン９割近くだった（オールドカマー）。1980 年代の労働力不足、円高、高収入を求めて、中東、ブラジル、中国、フィリピンなどから外国人が急増した（ニューカマー）。1990 年の入管法改正によって祖父母の一方が日本人であれば「就労と定住」が可能となった。以後、リーマンショックや東日本大震災・津波・原発事故があって減少するも 2017 年末では 2,561,848 人となり、およそ 50 人に１人が日本でくらしている。将来の人口減少社会における経済成長維持のために、今後も看護・介護、農林水産業、サービスや工業分野で人手不足が予想され、「外国人労働者」のニーズは高まる。国籍別でいえば、中国（約 73.1 万人、28.5%）、韓国・朝鮮（約 45.81、17.6%）、ベトナム（約 26.2 万人、10.2%）、フィリピン（約 26.0 万人、10.2%）、ブラジル（約 19.1 万人、7.5%）、ネパール（約 8.0 万人、3.1%）の順である。国際結婚も増加し、ミックスの子どもがふえ、学校においても日本語の指導が必要な外国にルーツを持つ子どもが増えている。

日本における外国人を取り巻く社会的課題は３つある。国籍条項による選挙権や職業選択の制限などの制度の壁、外国語表示ややさしい日本語などの言語の壁、外国人嫌悪・ヘイトスピーチ、白人崇拝・アジア人蔑視などの心の壁である。

４、多文化共生と人権

多文化共生に必要なのは、外国人は住民であり、市民としての社会参加が保証されることであり、立場の弱い人へのおもいやりやいたわりではない。社会的包摂には人権の考えが不可欠である。

最後にグループで今日の感想を共有してもらった。このように、グループでの話し合いを多くとったので、満足度も高く、理解度も非常に高かった（アン

ケート結果)。